

富の原地区には、

多くの戦争遺跡が今も残っています。

そのほとんどが

旧陸軍菊池飛行場のものです。

戦争遺跡の一つ、

木造格納庫の基礎には

弾痕が残っており、当時の

銃撃の激しさを物語っています。

「戦争」という多くの命が犠牲になった

悲劇の記憶を風化させないために。

そして平和へとつなげるために。

私たちのまちにあった、

菊池飛行場の記憶を追いました。

【特集】

未来に残す 菊池飛行場の記憶



基礎に残る機銃弾の跡
(9頁地図⑥)



空襲によって打ち砕かれた2日間

太平洋戦争時代、花房台地にあった菊池飛行場には、若き飛行兵が全国から集まり、戦争末期には特攻隊も来ていました。当時の記憶について探ります。

志を持った少年が
全国から集まった飛行場

旧陸軍菊池飛行場（通称：花房飛行場）は、昭和10年に着工し、昭和15年4月に完成しました。昭和16年には福岡県の大刀洗飛行場から第三航空教育隊が菊池飛行場へ移管。敷地の広さは約150ヘクタールで、県内最大規模の陸軍飛行場でした。

機体の整備を行う陸軍航空廠も設置され、昭和19年には陸軍航空通信学校が開校。氣象観測所や陸軍病院など、多くの部隊が常駐していました。昭和20年4月、米軍が沖縄へ上陸。本土への攻撃が始まるとともに、菊池飛行場は航

空特攻隊の中継基地へと変わります。全国の特攻隊員が飛行場を訪れ、空に消えていきました。

難関だった少年飛行兵に16歳で合格した前田祐助さん（旧戸崎村出身）は、昭和19年4月8日、陸軍航空通信学校菊池教育隊に16期生として入隊。「飛行機が好きだったんです。だから、飛行兵になりたいくて」。夢を叶えたい一心で入隊した前田さんは一人前の飛行兵となるため、厳しい訓練に耐え抜く日々を送ります。

しかし、入隊翌年の5月13・14日、飛行場は米軍機による爆撃を受け、大きな打撃を受けることになります。

した。その数分後、米軍機「グラマン」が襲来。前田さんは近くの防空壕に、宮内さんは周辺にいた飛行兵たちと防空壕代わりに使われていた大きな穴に重なり合うように逃げ込みました。米軍は穴から20・30メートル近くに爆弾を投下。爆発の衝撃で穴に土が入り込み、宮内さんは生き埋めになってしまいました。

攻撃が終わると、急いで仲間を助け出そうとします。「スコップがないので手で必死に掘り起こしましたが、どんなに掘っても数人の顔くらいしか出せない。せめて鼻の部分だけでも出して息ができるようにと何人かを救出しようと思いました。再び襲撃が来たらんです」

「逃げる」。上官からの命令で前田さんはその場を離れます。その後、助け出した仲間は米軍に狙い撃ちにされました。攻撃が終わりに、生き埋めになった仲間たちを日暮れるまで掘り出すと、一番下で飯ごうを抱えたまま冷たくなった宮内さんを見つけま

した。壊滅的な被害を受けた飛行場で、34人の戦友たちの遺体を並べ、前田さんは材木を運び、火を絶やさないよう、一晩中火葬しました。志を持ち、飛行兵となった少年が見た現実には残酷なものでした。

終戦後の飛行場

空襲により、飛行場内で亡くなったのは、警察の公文書によると69人と報告されています。翌日にも米軍の襲来により、大きな被害を受けました。飛行場は敗戦まで本土決戦の要として機能しましたが、終戦を迎えると残った少年兵はそれぞれの故郷に帰って行きました。

戦後は食糧増産の国策として、復員兵や戦災者などを中心とする約50人の開拓団が入植。空襲の中残った飛行場の施設が生活の基盤として使用されました。現在は住宅地となっていますが、当時活用していた施設が今でも数多く残っています。



通信学校の入学時、菊池神社を参拝する少年飛行兵。3列目左端が前田祐助さん(提供:前田さん)



菊池飛行場で給油中の九五式中間練習機。通称、赤トンボ。(提供:高谷和生さん)



飛行場の格納庫と防火用水。通信学校と合わせて12の格納庫があった(提供:高谷和生さん)



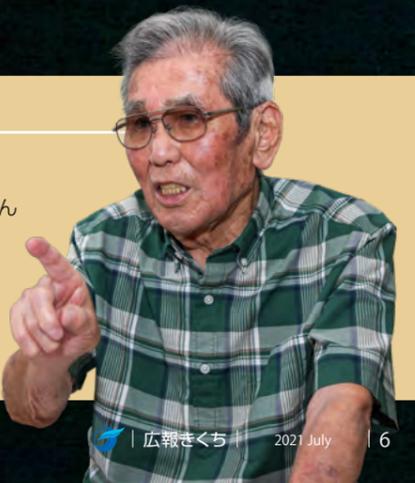
格納庫から見た滑走路には九五式練習機が並ぶ。後方に見えるのは鞍岳。現在の菊池の風景と変わらない景色が広がっている(提供:高谷和生さん)

Interview

元少年飛行兵
前田祐助さん
(93歳)



16歳当時の前田さん



Interview

戦争を二度と起こしてはならない

昭和18年、17歳で少年飛行兵15期生として入隊。翌年、菊池飛行場に赴任し、同郷の前田さんと偶然遭遇しました。軍規により気軽に話せる状況ではなく、二人が再会したのは終戦から12年後、県の元少年飛行兵の集まりの場でした。昭和20年8月14日、倉原さんは特攻命令を言い渡されます。「おふくろの写真は胸ポケットに仕舞い、この時ばかりは思いっきり泣きました」。しかし、翌日、終戦が告げられます。「負け戦とは分かっていましたが、聞いた直後、頭の中は真っ白でした。人を傷つけ、命を奪う。戦争は二度と起こしてはなりません」

元少年飛行兵 倉原義友さん(93歳・栄町)





遺跡の一部を紹介
遺跡がある場所は私有地のため、見学の際は近隣の迷惑にならないようご注意ください。



花房(菊池)飛行場の戦争遺産を未来につたえる会



戦争遺跡が伝えるものとは――

菊池飛行場跡には多くの戦争遺跡が残っています。その中でも給水塔は、終戦後の復興にも大きく貢献しました。戦争の記憶を継承し、保存していかうと活動する人々がいます。

給水塔を平和のシンボルに

「飛行場の記憶を語り継がねば、過去のものとして忘れ去られてしまう」。終戦から60年以上が経ち、危機感を抱いた元少年飛行兵や地元住民らなどの有志が、平成20年に飛行場の記憶と戦争遺跡の保存を目的に「花房(菊池)飛行場の戦争遺産を未来につたえる会」を設立しました。

会員の一人、永田昭さんは代表代行として、運営に力を注いでいます。「七城出身の父は小学生の頃から飛行場造成の動員として、滑走路沿い

に敷く石を菊池川から運んでいたそうです。子どもの頃は父に連れられ、跡地で空襲の話やよく聞かされてきました。私が40歳を過ぎた頃、父が話してくれたことを自分の目で確かめてみたくなったんです」。永田さんは現地に足を運び、歴史や遺跡などを調べるようになりました。その時に出会ったのが、現在会長を務める倉沢泰さんです。

陸軍中尉だった倉沢さんは終戦後、開拓団として富の原地区に入植。地区には水が普及しておらず、唯一水を供給できたのが、残存していた飛行場の給水塔でした。「給水

塔のおかげで戦後も住むことができた。戦火の中でも頑として倒れず、終戦後も私たちの命を支えてくれた存在を、復興と平和のシンボルとして後世に残していきたいと思いました」

会では戦争遺産の調査研究のほか、保存活動や見学会、講演会などを行っています。平成26年には、泗水孔子公園敷地内に「菊池飛行場ミュージアム」を開館しました。

「これだけ多くの戦争遺跡が残っている飛行場は全国的にも珍しく、とても貴重なんです。歴史と記憶を風化させないために資料として残し、伝えていかなければ」と永田さんは語ります。幅広い世代へ継承していくために、現在も活動に尽力しています。

未来へつなぐために

今年5月に入会した坂本真菜さんは「言葉では伝えられないものがある。表情や風景を絵で表現したい」と、前田さんと倉沢さんの戦争体験を

絵本にするために、絵に描き起こしています。

小さい頃、祖父母の戦争体験を聞いて育った坂本さん。大伯父は菊池飛行場の元少年飛行兵でした。15歳の時、祖父が他界。「このままでは、戦争の記憶を何も聞けず時間が過ぎてしまう」という思いから、自分で戦争や特攻隊の歴史を調べてきました。

「まだ若い十代の飛行兵たちが命を落としていきました。戦争を知る世代が減り、知らない世代が増えていくからこそ、私たちが学び、伝えていかなければならないと思うんです」

戦争という悲惨な過去を未来への平和とつなげていくために、坂本さんは活動への思いを強くします。



坂本さんが描いたイラスト



国内に2、3機しか残っていないプロペラ

ミュージアムに展示されている川崎造船所飛行機工場(現川崎重工業製造)の九三式単軽爆撃機のプロペラは、松永鎮さんが平成27年に提供したものです。太平洋戦争中、台湾の飛行場に勤務していた松永さんの父・昇さんが戦意高揚のために旧型機の木製プロペラを譲り受け、菊池市に寄贈するために菊池飛行場まで空輸し持ち帰りました。

「戦争が忘れ去られないように、多くの人の目に触れてもらい、記憶を受け継いでほしい。父の形見ですからね。たまにミュージアムに行って、きれいに拭き上げています」



松永 鎮さん(栄町)



【会員募集中】
現在56人の会員が所属。毎月第3土曜日に定例会を行っています。詳しくはお問い合わせ下さい。フェイスブックも随時更新中です。

【開館時間】午前10時～午後4時
【入館料】100円
菊池市泗水町豊水3-3-303
(有明の里 泗水孔子公園敷地内)
【問い合わせ先】
☎0698(38)2252
(富原保育園)



飛行場で使われていた資材や会員による調査を基にした菊池飛行場のジオラマ(地形模型)などを展示しています。菊池飛行場オリジナルグッズも販売。ぜひ、足を運んでみてください。

菊池飛行場ミュージアム



長さ1.75m、重さ24kg、軸の直径45cm、厚さ25cm。片側のプロペラは空輸の際に切り落とされた。切断面から合板の構造を見ることができ貴重な資料

8月15日で、終戦から76年。会の代表、倉沢さんは今年で100歳を迎えました。過去があるからこそ、私たちの今があります。8月、あなたの周りにある戦争の記憶について触れてみてください。犠牲となった命の記憶をつなぐためにも、私たちにできることを一歩ずつ。すべては、平和の礎を未来に築くために。

花房の地に眠る記憶を 残すことが 平和への道しるべとなる



菊池飛行場戦没者の慰霊塔(9ページ地図参照)
倉沢さんが園長を務めていた富原保育園の隣には、元少年飛行兵や戦友会、地元住民により、慰霊塔が建てられ、毎年4月に慰霊祭が行われています。



少年飛行兵に扮した生徒が
零戦に乗り込む

未来を担う 子どもたちへ

昨年、泗水中学校では正門表札の復元や戦争を題材にした演劇が行われました。また、市内外の小中学校が、飛行場跡地やミュージアムに見学や体験談を聞きに訪れるなど、会の活動は広がりを見せています。

遺跡を残していくために

昨年8月、会と泗水中学校の生徒が協力し、正門表札の復元をしました。当時の写真を参考に作成したもので、「あの頃の様子がありありと思い出される」と元少年飛行兵の前田さんは話します。会では資料を残すだけでなく、目に見える形で遺跡を復元する取り組みも進められています。

当時の人々の気持ちを
考えて演じた劇

昨年10月には、特攻を題材にした劇「ホタル帰る」を当時の泗水中3年生が学習発表会で披露。「菊池飛行場について触れながら、全校生徒に戦争について考えてもらった」と3年生の学年主任を務めていた岩谷寛教頭は話します。「戦争を知る人の生の声を聞く機会が減る中、2年前に倉沢さんに出会い、菊池飛行場を知りました。戦争に関する



岩谷 寛教頭

る劇を考えていて、生徒がふるさとを知るいきつかけになる思いました」

脚本は実話を基に岩谷教頭自ら作成。実物大の零戦も美術教諭と生徒が制作し、当時大学4年生で教育実習に来ていた坂本さんも制作に携わりました。

「少年飛行兵は生徒たちと年齢も近いので、当時の人たちがどんな気持ちだったか想像して演じるよう指導しました。演劇を機に生徒たちが飛行場や戦争のことを考えてくれたら」と岩谷先生は思いを語りました。今後は会と共に前田さんの戦争体験を生徒が紙芝居にし、小学校で読み聞かせを行う予定です。菊池飛行場の記憶は子どもたちにより、これからも語り継がれていきます。



飛行場正門の表札を生徒が資料を基に作成



表札は会員と共に正門に設置(9ページ地図参照)



プラスチックボードで制作した実物大の零戦

Interview 演劇「ホタル帰る」で迫真の演技を見せた卒業生2人に話を聞きました



少年飛行兵を演じた
服部 巧さん
(竹の下)

戦争は過去のことであり関係ないと思っていましたが、自分たちのまちでも戦争があったことを実感しました。自分がもし当時の人だったら、死にたくない、生きたいと考えたと思います。他の地域でも似たようなことがあったかもしれません。もっとたくさんの人に興味を持って歴史を学んでほしいです。



女学生を演じた
加藤舞音さん
(富の原西)

飛行場の存在は知っていましたが、戦争を身近なものとは思っていませんでした。でも、劇を通して同年代の人たちが自分の命をかけて戦っていたことを知りました。各地の戦争に関する絵画にも興味を持ち、今は高校の美術部に入っています。ぜひ多くの人に戦争について考えてもらいたいです。